

「特色ある教育実習プログラム」の実施に関する研究（Ⅱ）

— 「教育実習観察」の効果に関する調査研究 —

木原成一郎	松浦 伸和	井上 弥	山崎 敬人
谷本 忠明	磯崎 哲夫	山口 武志	長松 正康
森田 英樹	間瀬 茂夫	畑佐由紀子	草間益良夫
横田 明子	濱本 恵康	五十嵐史帆	深澤 広明
岡本 祐子	時永 益徳	栗原 慎二	松本 徹
神野 正喜	大松 恭宏	金丸 純二	河野 芳文
原田 良三	島本 靖	木本 一成	三藤 義郎
竹盛 浩二	河野 進		

1. はじめに

(1) 「特色ある教育実習プログラム」の実施

「特色ある教育実習プログラム」は、若元澄男他(2005)により提案され、その試行的取り組みの成果と課題が、若元澄男他(2006)および木村博一他(2007)に報告されてきた。さらに、木原成一郎他(2008)では、その本格的実施の効果が「教育実習入門」に焦点化して報告された。これらの「特色ある教育実習プログラム」の概要は、表1及び表2に示した。ここに示した二つの表は、木原成一郎他(2008)に掲載した表の再掲である。

これまで平成17年度および18年度に試行的取組が行われ、その結果、平成19年度より1年次に表1の「小学校教育実習入門」および表2の「中・高等学校教育実習入門」が授業化された。また2年次には、表1の「小学校教育実習観察」と表2の「中・高等学校教育実習観察」が実施され、「小学校教育実習観察」は平成20年度に、「中・高等学校教育実習観察」は平成21年度より授業化された。

「特色ある教育実習プログラム」としてこれらの授業科目を新設した意図は、若元澄男他(2005)によれば次の問題を解決することにあった。つまり、以前の教育実習においては、大多数の学生は、1単位の事前指導(観察実習)と5単位又は4単位の本実習(教壇実習)を3年次又は4年次で履修することになっている。しかし

それ以前に教育実習に関する科目が開設されていないため、教員志望学生の学習意欲が低下する、教育実習での体験を反省し認識した課題を解決する機会がほとんどないという問題が指摘されていた。また4年次の教育実習は採用試験の時期に前後するため学生と附属学校園の双方から実施時期の問題が指摘されていた。この問題に対して、1年次に「教育実習入門」、2年次に「教育実習観察」が置かれるとともに、平成20年度より4年次(7セメと8セメ)の「中・高等学校教育実習」が3年次(6セメ)に移行して実施されることとなった。

これらの他に、若元澄男他(2005)は、「特色ある教育実習プログラム」として公立学校園での教育実習を提案した。この問題に対して、それまで社会貢献検討委員会の所掌で試行されてきた4年次の「インターンシップ型教育実習」を、平成18年度から教育実習部会の所掌として実施した。

ただし、当初の構想で2年次に提案されていた小学校での「近隣公立学校における観察参加等」や「隣接校種の参観」、中・高等学校での「定期的に学校を訪問」、さらに3年次に構想されていた小学校と中・高等学校での「近隣公立学校の教育実習」は、今後の課題として残されている。

木原成一郎他(2008)によれば、平成19年度に授業化された「教育実習入門」は、小学校の場合に「小学生」「教員の仕事」及び「授業」の各項目に関するイメージ

Seiichiro Kihara, Nobukazu Matsuura, Wataru Inoue, Takahito Yamasaki, Tadaaki Tanimoto, Tetsuo Isozaki, Takeshi Yamaguchi, Masayasu Nagamatsu, Hideki Morita, Shigeo Mase, Yukiko Hatasa, Masurao Kusama, Akiko Yokota, Yoshiyasu Hamamoto, Shiho Ikarashi, Hiroaki Fukazawa, Yuko Okamoto, Masunori Tokinaga, Shinji Kurihara, Toru Matsumoto, Masaki Jinno, Yasuhiro Omatsu, Jyunji Kanamaru, Yoshifumi Kono, Ryoze Harada, Yasushi Shimamoto, Kazushige Kimoto, Yoshiro Mito, Koji Takemori, Susumu Kono: An Enforcement of 'Distinct Teaching Practice' at Hiroshima University (Ⅱ)

や理解の深まりをもたらし、中・高等学校では教職に対する目的意識の高まり、教える立場への視点の転換をもたらすという効果があった。ただし、教育実習入門の客観的・具体的な到達目標を明確にしていくこと、附属学校と大学との連携強化、受講者数に応じた施設・設備の充実という改善すべき問題も指摘された。

(2) 研究の目的

本研究の目的は、昨年度より本格的に実施された「特色ある教育実習プログラム」の実施に関して、「教育

実習観察」の効果に焦点化して報告することである。

「教育実習観察」の目標は、2年次生が3年次生の教育実習を観察することによって、教育実習に対するイメージを持ち、教職を志望する学部学生としての意識を高めるとともに次年度の教育実習の準備を行うことにある。以下、第1に「小学校教育実習観察」を検討し、第2に「中・高等学校教育実習観察」を取り上げ、最後に「教育実習観察」の成果と課題を論じる。

(文責：木原成一郎)

表1 小学校教育実習の4年間

1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生
ふ れ あ い 型	学 校 参 加 型	実 習 型	イ ン タ ー ン シ ッ プ 型
○「地域教育実践Ⅰ」「地域教育実践Ⅱ」(フレンドシップ事業)→子ども理解, 学校理解	○「小学校教育実習観察」3年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験	○現行の教育実習 継承	○就職直前実習 (近隣公立学校)
入 門 型	○近隣公立学校における観察参加等 ○隣接校種の参観(「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施)	○近隣公立学校の活用(「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施)	リ サ ー チ 型
○「小学校教育実習入門」→学校の授業参観なども含む			○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動

表2 中・高等学校教育実習の4年間

1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生
入 門 型	学 校 参 加 型	実 習 型	イ ン タ ー ン シ ッ プ 型
○「中・高等学校教育実習入門」→学校の授業参観なども含む	○「中・高等学校教育実習観察」3年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験(平成19年度は3年生で実施)	○現行では4年生(7セメと8セメ)の教育実習を3年生(6セメ)に移行して実施	○就職直前実習 (近隣公立学校)
	○「学校」を知る, 「生徒」を知る。授業は行わず, 定期的に学校を訪問する。(「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施)	○近隣公立学校等で補充的教育実習(「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施)	リ サ ー チ 型
			○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動

2. 「小学校教育実習観察」の成果と課題

2.1 大学側からの見解

(1) 実施概要

平成20年度の「小学校教育実習観察」は、平成18年度及び平成19年度の試行的取組の成果を踏まえ、初等教育教員養成コースを対象とした教育実習に関する4セメ開講の集中講義の形態による選択授業科目として実施された。実施は、①授業概要説明、②希望校調査、③事前指導Ⅰ(全体ガイダンス)、④事前指導Ⅱ(学校別ガイダンス)、⑤教育実習観察、⑥事後指導(学校別ディスカッション及び総括, 全体まとめ)という流れと内容で行った。概要は次のとおりである。なお、今年度、附属小学校の教育実習観察については、平成19年度の課題を踏まえ、観察する一日当たりの学生数を減少させるため二日間にわたって実施した。

1) 目的

2年次生を対象として、3年次生が行う小学校教育実習を観察することによって、小学生及び小学校教育実習に対するイメージを持ち、教職を志望する学部学生としての意識を高めるとともに次年度の教育実習の準備を行う。

2) 受講者数：145名

- ▽ 附属小学校 47名 (16日/23名, 17日/24名)
- ▽ 附属東雲小学校 49名
- ▽ 附属三原小学校 49名

3) 実習観察の実施内容

朝の子どもとの出会いから、子どもの下校時の様子まで、配属学級における1日の子どもの生活を理解するとともに教育実習生の子どもへの働きかけや教壇実習に取り組む姿勢を学ぶ。

4) 日程

① 4月8日	授業概要説明（履修ガイダンス）	
② 6月19日	教育実習観察校希望調査	
③ 7月17日	事前指導Ⅰ（全体ガイダンス及び3年次生の講話，クラス長との打ち合わせ）	
④ 事前指導Ⅱ及び教育実習観察		
	校名	教育実習観察
	附属小	① 9月16日（火） ② 9月17日（水）
	東雲小	9月25日（木）
	三原小	9月29日（月）
⑤ 10月2日	事後指導（学校別ディスカッション及び総括，全体まとめ）	

教育実習観察当日の主な内容は、配属されたクラスの教育実習生の教壇実習や児童とのかかわりを観察することを主としながら、授業反省に参加したり教育実習生の授業準備等を観察したりすることであった。来年度の教育実習に向けての準備や心構え等についての講話が設定された学校もあった。

（2）成果と課題

以下では、2年次生、3年次生、各附属小学校教員を対象として行った質問紙調査の結果を示しながら、本年度の成果と課題について検討する。なお、回答数は、2年次生134名（95.1%）、3年次生126名（80.2%）教員48名である。

1）2年次生の意識

①「教育実習観察」実施前の受講生の意識

教育実習観察実施前の教育実習観察に対する学生の期待感について5件法で尋ねた質問Ⅳ（ア）～Ⅳ（エ）に対する回答結果は、本頁の表3の通りであった。表3から分かるように、四項目とも評定平均値は4.0以上である。肯定的な回答の学生の割合は（ア）（ウ）（エ）で92.5%以上と高い数値を示している。小学校及び子どもに対する観察や教育実習の観察への期待感が高いといえよう。「Ⅳ（イ）附属の先生の優れた授業を見るのが楽しみだった」に対する肯定的な回答は、73.9%にとどまっている。受講生が教育実習生への観察に主眼を置こうとしていることや昨年度（1年次）の小学校教育実習入門の「学校体験」、教職入門の「学校体験」等ですでに授業観察を行っていることが影響した結果と考えられる。

②「教育実習観察」実施後の受講生の意識

教育実習観察実施後の教育実習観察に対する学生の

意識（質問項目Ⅳ（オ）～Ⅳ（ス））を5件法で尋ねた回答結果を次頁の表4に示す。

教育実習観察が有意義だったかどうかを尋ねたⅣ（コ）の評定平均値は4.67と高く、肯定的に評価した学生の割合も97.0%という結果であった。また、イメージや理解が深まったかどうかを「小学校」「教員の仕事」「授業」、それぞれに対して尋ねたⅣ（オ）（カ）（ケ）においても、評定平均値が4.34～4.46、肯定的な評価の学生も88.1%～95.5%と高い範囲であった。特に、Ⅳ（キ）の教育実習へのイメージが高まったかどうかの項目に対しては、評定平均値が4.84、肯定的な回答の学生は98.5%と非常に高い結果であった。このような数値の高さは、質問Ⅶ「教育実習観察を終えた今、本実習までの1年間において、自分自身が取り組まなければならない課題は何ですか」への自由記述による回答結果からもうかがうことができた。その記述には、今後、教職意識のより一層の涵養をはじめ、授業に関する知識・スキルの向上、子どもへの接し方、自身の資質・能力の向上を述べるものが多く見られた。

これらから、来年度の教育実習に向けての諸準備を進める契機になっていることが読み取れる。特に、教育実習における授業実施に向けて具体的な方策等を考える必要性を述べる記述が多く見られ、実際に教壇に立つことへのイメージをもったことがうかがえる。

次頁の表5は、事前指導に関する2年次生と3年次生の回答結果である。両者ともに2年次生と3年次生との連携は有意義と捉えていることが分かる。2年次生の自由記述を見ると、3年次生クラス長との打ち合わせはもとより、特に3年次生の経験談を聞くことが役立つとの意見が多くあった。また、3年次生との打ち合わせについて、時間の確保、内容の深化、ペア学生との対面などを要望する意見が多く見られた。これは、3年次生の意見にもあり、クラス長との顔合わせのみでなく全員での打ち合わせの要望も見られた。

2）附属校教員の意識

小学校教育実習観察に関して、「実施したほうがよい」との設問に肯定的に回答した割合は、77.1%（昨年度75.5%）、「観察態度はよかった」への肯定的な回答の割合は88.3%（昨年度65.3%）、3年次生への効果についての肯定的な回答は、83.3%であった。また、2年次生

表3 小学校教育実習観察実施前の受講生の意識

項目	評定尺度					平均値 肯定的回答
	5	4	3	2	1	
Ⅳ（ア）小学校に行くのが楽しみだった	81 60.4%	43 32.1%	6 4.5%	3 2.2%	1 0.7%	4.49 92.5%
Ⅳ（イ）附属の先生の優れた授業を見るのが楽しみだった	51 38.1%	48 35.8%	22 16.4%	10 7.5%	3 2.2%	4.00 73.9%
Ⅳ（ウ）子どもの姿を見るのが楽しみだった	89 66.4%	36 26.9%	5 3.7%	3 2.2%	1 0.7%	4.56 93.3%
Ⅳ（エ）教育実習生の実際を見るのが楽しみだった	110 82.1%	19 14.2%	3 2.2%	2 1.5%	0 0.0%	4.77 96.3%

〔注〕評定尺度は、「5. そう思う」「4. 少しそう思う」「3. どちらでもない」「2. あまりそう思わない」「1. そう思わない」の5段階で、上段は回答者数、下段は全回答者に占める百分率を示す。表4及び表5も同様である。

表4 小学校教育実習観察実施後の受講生の意識

項 目	評定尺度					平均値 肯定的回答
	5	4	3	2	1	
IV (オ) 小学校のイメージが深まった	66 49.3%	52 38.8%	12 9.0%	4 3.0%	0 0.0%	4.34 88.1%
IV (カ) 教員という仕事のイメージが深まった	77 57.5%	48 35.8%	5 3.7%	2 1.5%	1 0.7%	4.49 93.3%
IV (キ) 来年度の教育実習に対するイメージが深まった	115 85.8%	17 12.7%	2 1.5%	0 0.0%	0 0.0%	4.84 98.5%
IV (ク) 教職への志望動機が高まった	45 33.6%	58 43.3%	26 19.4%	2 1.5%	3 2.2%	4.04 76.9%
IV (ケ) 授業へのイメージが深まった	70 52.2%	58 43.3%	4 3.0%	1 0.7%	1 0.7%	4.46 95.5%
IV (コ) 教員を目指すものとして有意義だった	96 71.6%	34 25.4%	3 2.2%	0 0.0%	1 0.7%	4.67 97.0%
IV (サ) 今後も続けた方がよいと思う	124 92.5%	10 7.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4.93 100.0
IV (シ) 回数を増やし、幼稚園、中学校等にも行ってみたい	86 64.2%	33 24.6%	9 6.7%	6 4.5%	0 0.0%	4.49 88.8%
IV (ス) 教員を目指す上での自分の課題が明らかになった	69 51.5%	51 38.1%	9 6.7%	4 3.0%	1 0.7%	4.37 89.6%

表5 小学校教育実習観察における事前打ち合わせに関する意識

項 目	評定尺度					平均値 肯定的回答
	5	4	3	2	1	
3年 III (i) 2年生との事前打ち合わせは、2年生にとって、有意義か	1 5.0%	12 60.0%	4 20.0%	2 10.0%	1 5.0%	3.50 65.0%
3年 III (ii) 2年生との事前打ち合わせは、負担だったか	0 0.0%	2 10.0%	4 20.0%	5 25.0%	9 45.0%	1.95 10.0%
2年 II ①事前指導は「教育実習観察」に参加する上で有意義でしたか	78 58.2%	37 27.6%	7 5.2%	7 5.2%	3 2.2%	4.36 85.8%
2年 III ①事前指導I においての3年生との事前打ち合わせは、有意義でしたか	68 50.7%	40 29.9%	11 8.2%	10 7.5%	4 3.0%	4.19 80.6%

の観察態度等に関する自由記述は概ね良好との記述が多く見られる一方、目的意識が不十分、社会人としてのマナー向上などの指摘が少数ながら見られた。

以上の結果から、小学校教育実習観察は、教職に関する意識向上や次年度の教育実習に向けた課題意識の形成等の点で効果が上がっているといつてよい。しかしながら、参加学生の当日の態度、事前指導等に関して改善を要する課題が明らかになった。今後は、参加学生の目的意識の涵養や態度の向上などを目途とした指導内容をより一層構築すること、とりわけ2年次生と3年次生との連携の充実が課題として考えられる。(文責：松本徹)

2.2 附属学校側からの見解

(1) 附属小学校

本校では、「教育実習観察」のために各学級に配属される2年次生の人数に配慮して、今年度は連続した2日間で受け入れた。これは、2年間の試行を経て今年度から科目として単位化されるにあたり、受講する2年次生が増えることが予測されたためである。

現に昨年度の反省として、「これ以上、『教育実習観察』を受講する2年次生の数が増えるようであれば、教室に2年次生の居場所を確保することが難しい」という指摘が本校教員から出ていた。そのことへの対応策として、昨年度までは1日で実施した「教育実習観察」を今年度は2日間に変更したのである。今年度は

1日目に来校する班と2日目に来校する班に分けたので、日数は2日間に増えたが、両日とも各学級の受入人数を少なくすることができた。その結果、決して余裕があるとは言えないものの、2年次生が3年次生の「小学校教育実習」の実際を観察するのに必要なスペースを教室内に確保することができた。

さて、試行を含めて3年目になる「教育実習観察」であるから、その効果のほどは認識されつつある。初年度に実施したアンケートへの回答のなかに多く見受けられた「問題意識が低い」「何のために来ているのか分からない」「来年度は自分たちも教育実習生だという自覚が足りない」「いい加減な気持ちなら来てほしくない」という類のマイナス評価がほぼなくなり、概ねプラス評価に転じている。本校教員、3年次生ともにアンケートへの回答は同じ傾向にある。

これには、「教育実習観察」の目的や意義についての2年次生の理解度が高まっていることがあると考えられる。おそらくは、大学での事前指導が昨年度までのマイナス評価を踏まえた内容になっていて、それが実を結んでいるのであろう。

最後に課題として考えられることを挙げておく。それは「教育実習観察」の回数についてである。本校が2日間にわたって受け入れていると言っても、個々の2年次生にとっては1日(1回)だけの来校である。これで、「教育実習観察」が十分な成果を挙げている

と評価してよいものかどうか。せめてあと1回でもよいから観察の機会を増やすことはできないものだろうか。「教育実習に対するイメージを持ち、教職を志望する学部学生としての意識を高めるとともに次年度の教育実習の準備を行う」という目的に照らしても、1回の「教育実習観察」では十分ではないと思われる。

来校の機会が増えれば、ただ観察するだけでなく、3年次生との協同の場を設けることも可能になるであろう。(文責：神野正喜)

(2) 附属東雲小学校

9月25日(木)、2年次生を対象とする小学校教育実習観察を行った。目的は、3年次生が行う教育実習の様子を観察することによって、小学生及び小学校教育実習に対するイメージを持ち、教職を志望する学部学生としての意識を高めるとともに次年度の教育実習の準備を行うことである。

この目的を達成するために、東雲小学校では「一斉授業」の日を観察実習の日として設定した。「一斉授業」とは、これまでの教育実習で学んだことをもとに自分の授業を他の学年・クラスの実習生に評価してもらう授業である。これまでは同じクラスの実習生同士が、授業に関して意見交換し、共同で教材研究も行っている。つまり、内情を共通理解している者同士での授業の反省が行われることとなる。しかし、一斉授業はいつもと違う参観者の目が注がれることとなる。当然、緊張感も高まり、授業後の評価も気になる場所である。この一斉授業に取り組む3年次生の真摯な姿を観察することが、2年次生の教育実習に対する心構えをつくる上で、よりよい時間となると考えたからである。

当日は、朝の会・縦割り活動から始まり、午前中4時間の授業を観察した。当然2年次生から見た授業に対する評価カードも記入し、授業者に渡すこととなる。午後は、帰りの会観察後、副校長講話「来年度の教育実習に向けて」を聞き、その後、3年次生の教材研究及び学級反省会に参加した。朝8時15分から18時30分まで、密度の濃い一日であった。

講話の時間の最初に観察実習の感想を聞いたところ、教職に対する意気込みを感じることができた。一人一人が素朴な疑問をもって観察しており、授業を見る目も核心から大きくはずれてはいない。授業の準備物や発問だけでなく、授業者の姿勢や声のトーン・子どもたち一人一人への声かけなどにも注目していたようである。その場ですぐに自分の考えや気づきを表現する力もあり、こちらが指導したことに対する反応もすぐに見られた。特に、東雲小学校の特色である「複式学級」や「縦割り活動」に対する興味は深かったようで複数の質問が出された。異学年のかかわり・体験からの学び・遊びからの学びなど、小学生の生の姿に触れることができたことも大きな感動となったようである。

今回の観察実習を単に観察だけで終わらせないように、疑問をもって見ること・疑って見ること・自分だったらこうしようと考えながら見ること、などを大切にして日々生活して欲しい。大学の講義も受身で受けるのではなく、主体的な学びへと転換して3年次の教育実習へとつなげていってもらいたい。

(文責：大松恭宏)

(3) 附属三原小学校

「3年次生達の姿を見て、とても刺激になった。最近自分なりにいろいろと悩むことがあったが、がむしゃらに子ども達と向き合う先輩達の姿を見て、スタートラインに立つことだけを考えようと、吹っ切れることができた。教育実習に向けて頑張りたい。」と実習観察を終えた直後の感想である。この実習観察は、単に来年度の自分たちの実習に、見通しを持たせると言うだけでなく、実習そのものに疑問、不安、躊躇を感じている学生にも非常に有効で、悩み等を明日からの期待に変えていると思った。

①3年目になる実習観察生が今年も9月29日に本校に来てくれました。体育館に集合し、大学の先生3名と本校の実習担当教師と副校長が日程等について説明をする。その後、各クラスに所属している実習生が実習観察生を呼びにくる。ここから1日が始まるのである。実習生の授業はもちろんであるが、ホームルーム活動や掃除、食事(給食ではない)、休み時間、最後授業反省会まで、全て実習生とともに動き、活動するのである。そして最後に、学級単位で校長室に来て、名札の提出とともに、大学の先生と副校長の前で今日の感想を述べて、1日が終わるのである。

②平成19年度と平成20年度のアンケート結果から今年の成果を判断していく。

19年度は、大きく2つの点で不明のまま出発した。実習委員会で検討していただき納得したことがよい結果につながったと思う。1つは、実習観察は、実習生を観察することに専念させてしまった。よって、子ども達とのふれあいが不十分だった。2つ目は、観察実習生の呼び名である。先生と呼ぶことで統一していただき、安心して本校の教師も対応できた。[今回の参観は、自分たち(2年生)にとって成果のあるものだった。]の問いに、「とてもそう思う」と答えた学生は19年度が5割程度なのに、20年度全員がとても成果があったと答えている。

③最後に、校長室で実習観察を終えた学生に本音の感想を述べてもらいました。

- ・身近な先輩達が実際に授業している様子を見て、今まで想像することができなかった教育実習を身近なものに感じれたことはよかった。また、授業案ももらえたし来年に役立たせたい。
- ・実際に先輩達が作った指導案や反省会、相談の様子

を見せていただいて自分にとっての目標がより明確になった。想像だった世界が本当にクリアになった。教員になりたいという気持ちをより強く持つようになった。(文責：金丸純二)

3. 「中・高等学校教育実習観察」の成果と課題

3.1 大学側からの見解

(1) 実施概要

「中・高等学校教育実習観察」(以下、「中・高実習観察」)の目的は、附属校における教育実習を観察することによって、中・高校生および中・高等学校教育実習に対するイメージを具体的にもつとともに、教職を志望する学部学生としての意識を高め、教育実習の準備を行うことにある。「中・高実習観察」の受講学生(以下、「観察実習生」)は、教育学部第2類から第5類までの学生である。平成20年度は、教育実習に関するカリキュラムの移行期にあたるため、2年次生と3年次生が受講している。具体的には、6月4日から6月17日までの日程で実施された「中・高等学校教育実習Ⅰ」(以下、「中・高実習Ⅰ」)については、3年次生が観察実習生として4年次生の教育実習を観察している。また、9月18日から10月3日までの日程で実施された「中・高実習Ⅰ」については、2年次生が観察実習生として3年次生の教育実習を観察している。つまり、3年次生は6月に観察実習生として4年次生の教育実習を観察したとともに、その約3ヶ月後には、2年次生によって教育実習の様子を観察されたことになる。なお、平成20年度の「中・高実習観察」は単位化されていなかったが、平成21年度からは、2年次生を対象とする授業として単位化される予定である。

さて、平成20年度の実施の概要は次の通りである。まず、観察実習生を対象に、4月初旬に「中・高実習観察」に関する説明ならびに調査票の配布、回収を行った。調査票では「介護等体験」などとの重複を避けるための日程調査や連絡先などの確認を行っている。その後、調査票に基づいて配属校を決定するとともに、「中・高実習Ⅰ」を受講している教育実習生(以下、「教育実習生」)と観察実習生とのペアリングを決定した。各観察実習生が附属校に赴く日数は2日であり、その日程については、教育実習生の具体的な授業担当割が決まった時点で、観察実習生に電話によって直接伝えられた。この電話連絡は、「中・高実習Ⅰ」に関する「附属学校オリエンテーション」の開催日に主に行われた。

「中・高実習観察」の当日の勤務時間は、両日とも8時30分から17時までである。出勤時と退勤時には校長室に報告することとなっており、出勤の際には、出勤簿への押印も義務づけられている。

(2) 成果と課題

「中・高実習観察」の成果と課題を考察するために、

観察実習生243名と教育実習生245名の両グループを対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査の概要は次のとおりである。

○**調査対象**：「中・高実習Ⅰ」(期間：平成20年9月18日～10月3日)を受講した教育実習生(主として3年次生)およびその教育実習を観察した観察実習生(主として2年次生)

○**調査方法**：「中・高実習観察」あるいは「中・高実習Ⅰ」の終了時に、附属校を通じてアンケート用紙を配布し、学生支援室において回収した。

○**回収率**：観察実習生85.2%(243名中207名)、教育実習生91.8%(245名中225名)

① 「観察実習生」に対するアンケート結果とその考察

表6は、観察実習生による「中・高実習観察」に対する印象をまとめたものである。「中学生あるいは高校生のイメージが深まった」、「教育実習のイメージが深まった」、「教員を志す者として有意義だった」という各質問項目に対して、「そう思う」あるいは「少しそう思う」と肯定的に回答した観察実習生の割合は、それぞれ86.8%、99.5%、89.3%であった。実際、「中・高等学校教育実習観察を通じて最も学んだことを自由に記述してください」という質問項目に対して、例えば、次のような肯定的な意見が記述されている。

「授業をつくるのは、教員ではなく、子どもたち自身であることを学んだ。もちろん、授業者は教員、授業を準備するのは教員ではあるが、子どもたちの発言、活動によって、授業はできあがるのであり、いかにして子どもたちの力をひき出すか、また、力をつけさせるかが、大変重要であると感じた。大変有意義で、意欲をかきたてられる2日間であった。」

一方、「教育実習に向けて、準備すべきことが明らかになった」という質問項目に対して、「そう思う」あるいは「少しそう思う」と肯定的に回答した観察実習生の割合は93.2%に及んでいる。このことに関連して、「本実習までの1年間に取り組むべき課題」を尋ねた結果が表7である。表7をみると、教科内容や教材研究に関する課題をはじめ、授業づくりに関する課題、学習指導案の作成過程に関する課題をあげている観察実習生の割合が高くなっている。また、表6の(エ)の質問項目「教育実習に対する不安が軽減した」に対して、「そう思わない」あるいは「あまりそう思わない」と回答した観察実習生は52.9%となっている。教育実習の様子を観察することによって、自らの課題が明確になる一方で、その課題の解決に対して不安を感じている観察実習生が多いという実態も浮き彫りになっている。

② 「教育実習生」に対するアンケート結果とその考察

観察される立場である教育実習生からみた「中・高実習観察」に対する印象をまとめたものが表8である。アンケートに回答した教育実習生の94.7%が6月

期に「中・高実習観察」を受講している。

「教育実習観察」で2年生が来るとわかったときは、不安であった」という質問項目に対して、「そう思う」あるいは「少しそう思う」と回答した教育実習生の割合は32.9%であり、それほど高くはない。一方、「2年生が、教育実習を観察することは有意義である」という質問項目に対して、「そう思う」あるいは「少しそう思う」と回答した教育実習生の割合は86.7%となっている。これらの結果をみると、教育実習生も「中・高実習観察」の意義や効果に対して肯定的な印象をもっていると考えられる。

さらに、教育実習生からみた「中・高実習観察」の具体的な効果について質問した結果をまとめたものが表9である。6月期の「中・高実習観察」の経験が役立った点としては、「授業づくりの過程を観察することができた点」や「教育実習生による指導技術を観察することができた点」、「学習指導案の作成過程を観察することができた点」を多くの実習生が指摘している。

③今後の課題

観察実習生や教育実習生のアンケート結果を総合すると、「中・高実習観察」は、中・高校生や教育実習のイメージを深めたり、教職への意識を高める上で、有効であったといえる。

今後の課題としては、次の3点があげられる。第1は、事前指導のさらなる充実である。例えば、観察実習生の自由記述には、2日間の実習観察の具体的な視点や内容に関する説明を事前指導に期待する意見が多くみられる。また、観察する授業の単元や学習指導案を事前に十分に知りたいという意見も寄せられている。第2は、評価の在り方に関する検討である。平成

21年度からの単位化に伴い、観察録の整備も含め、評価の視点を具体化する必要がある。第3は、表7で示されているような観察実習生が認識した課題に対する支援の充実である。大学における授業内容との接続などを検討することが求められる。（文責：山口武志）

3.2 附属学校側からの見解

(1) 附属中・高等学校

本年度の「中・高等学校教育実習観察」は、1年次の「中・高等学校教育実習入門」に続く教育実習プログラムの一環として、平成19年度入学生を対象に、3年次生が実習を行う9月18日（木）から10月3日（金）までの期間中に実施された。受講した学生はこの期間中、任意の2日～3日間を設定し、1時間の教壇実習に先だって行われる実習生と指導教員との打ち合わせ段階からその様子を観察し、翌日行われる実際の授業を経て、その反省会においては討議に参加するという一連の流れによって教育実習の実施状況を観察した。

実習を行う3年次生の様子を観察する2年次生の目には、来年は自分がこの実習に臨むのだという自覚と緊張感が感じられ、実習生さながらの真剣な態度が印象的だった。中には3年次生以上に積極的に指導教員に質問をする観察実習生もあったようだ。一年後の実習までに身につけておくべき学力、教材研究の要領、指導態度など、様々な視点から教育実習の在り方を意識する契機になったものと思う。これこそが実習観察の意義であり、成果であった。

その反面、様々な課題を残したことも事実である。一部の学生だが、実習観察の意義を十分に理解しているとはいいがたい言動も見られた。自分なりの教材観

表6 観察実習生による「中・高実習観察」に対する印象（有効回答者数：206、数値は%）

質問項目	1	2	3	4	5	無回答
(ア) 中学生あるいは高校生のイメージが深まった	0.0	3.4	8.7	48.5	38.3	1.0
(イ) 教育実習に関するイメージが深まった	0.0	0.0	0.5	22.3	77.2	0.0
(ウ) 教育実習に向けて、準備すべきことが明らかになった	0.0	1.9	4.9	57.3	35.9	0.0
(エ) 教育実習に対する不安が軽減した	17.5	35.4	23.8	19.4	3.9	0.0
(オ) 教員を志す者として有意義だった	0.5	0.5	9.2	34.0	55.3	0.5
(カ) 教職への志望動機が高まった	3.4	5.3	29.1	39.8	22.3	0.0

[注] 評定尺度は、「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらでもない」「4. 少しそう思う」「5. そう思う」の5段階である。なお、各数値は小数第二位を四捨五入したものである。

表7 本実習までの1年間の課題（有効回答者数：206）

質問項目	割合 (%)
1 学習指導案の作成過程に関すること	42.7
2 授業づくりに関すること	52.9
3 発問や板書などの指導技術に関すること	24.3
4 教科内容や教材研究に関すること	59.7
5 生徒理解、生徒指導に関すること	18.0
6 その他	2.4

[注] 上記6つの項目の中から2つまでの項目を選択させた。なお、各数値は小数第二位を四捨五入したものである。

表8 教育実習生による「中・高実習観察」に対する印象（有効回答者数：225，数値は%）

質問項目	1	2	3	4	5	無回答
(ア)「教育実習観察」で2年生が来るとわかったときは、不安であった	38.2	18.2	7.1	25.8	7.1	3.6
(イ)「教育実習観察」の当日、2年生がいたのでやる気がでた	5.8	15.6	30.2	28.9	16.0	3.6
(ウ)2年生が、教育実習を観察することは有意義である	0.4	3.1	6.2	28.9	57.8	3.6

[注] 評定尺度は、「1. そう思わない」「2. あまりそう思わない」「3. どちらでもない」「4. 少しそう思う」「5. そう思う」の5段階である。なお、各数値は小数第二位を四捨五入したものである。

表9 「中・高実習観察」での経験が役立った点（有効回答者数：215，数値は%）

質問項目	割合 (%)
1 教育実習生による学習指導案の作成過程を観察することができた点	35.3
2 教育実習生による授業づくりの過程を観察することができた点	54.4
3 発問や板書など、教育実習生による指導技術を観察することができた点	47.0
4 教育実習生による教材研究の過程を観察することができた点	29.3
5 教育実習生による生徒理解、生徒指導に関する様子を観察することができた点	17.2
6 その他	10.2

[注] 上記6つの項目の中から2つまでの項目を選択させた。なお、各数値は小数第二位を四捨五入したものである。

を持つこともなくただ漠然と実習生の授業を傍観しているような学生や、教材の理解が中学生・高校生のレベルに終始している学生もあったと聞く。教壇に立つ実習生の身になって授業を観察する意識付けの指導が必要であろう。実習観察に先立つ事前指導の内容検討と、その充実が望まれる。教科によっては、事後にレポートを提出するように大学の授業で指導を受けているケースもあるようだ。

体制面での課題も見られた。一つは、実習を行う3年次生と実習観察をする2年次生との連絡体制が不十分であったために、授業予定を確実に伝えることができなかった点である。両者のペアリングを早い時期に確定し、授業の予定が固まった時点で早急に連絡を取り合うという体制の整備が求められる。

もう一つは、たとえば理科の実習観察で化学の授業観察を希望していた2年次生が生物の実習生とペアになっていたという、ペアリングの不具合である。大学における事前の希望調査を確実にすることで、このような事態は回避できるはずである。

来年度の教育実習においては、これらの課題を克服し、より充実した実習観察のプログラムが実現することを望むものである。（文責：原田良三）

(2) 附属東雲中学校

本校においては、本教育実習観察の具体的な目標を「よい授業をつくるための要件をつかむ」「本実習に向けて自らの課題を具体的にもつ」の2点に重点化・焦点化した。指導教員12名から①観察実習生の態度や意欲、②指導の実際、③現行教育実習観察の改善点についてアンケートした結果は、次の通りである。

観察実習生の態度や意欲については、本実習までに身につけておくべき知識・技能、態度などを自覚するうえで、「本実習での自分をイメージしながらまじめに観察していた」など、肯定的な回答が8名の教員から示された。しかしながら、「授業に関する知識が不足し

ている」「課題意識をもたない実習生がいる」「社会的なルール・マナーの学習が必要である」などの指摘も見られた。大学・附属学校における事前指導の内容と役割分担について、検討を要するものと考えられる。

観察実習生に対する指導の実際については、あまり指導できなかったと考える指導教員が9名であった。「本実習生と一緒に指導できた」「授業の批評会へ参加しコメントさせた」など、本実習生の授業検討を通して間接的な指導が行われた。本来観察実習生への直接的な指導は義務づけられていないが、積極的な指導を行うための時間が保障されておらず、観察実習生自身も観察に専念するとの受動的な意識から、指導が十分にできなかったと自覚する教員が多かったといえる。

教育実習観察システムについては、現行のままでよいが8名、改善を要するが4名であった。「先輩の動きや実習内容を知り事前準備ができる」「本実習に向けて心構えをもつにはよい」など、一昨年前のアンケートより肯定的な回答が増加している。これは、先の具体的な目標を観察実習生と指導教員が共有し、何をどこまで教え・学ばばよいかを明確に示したことが有効であったと考えられる。改善点としては、「教科でのまとめをする時間を確保してほしい」「教育実習観察に参加しない学生にこそ伝えなければならない」などの意見があった。教育観察実習の成果が実習生の意欲や課題意識のみに委ねられれば、3年生の本実習指導は必要以上の時間と労力を要することになるであろう。

本校では、教育観察実習終了時に「観察実習でつかんだ授業づくりの要件をできるだけ多くあげなさい」「本実習に向けて自らの具体的な課題をあげなさい」の2点を記述し、観察実習生が自己評価できるようにした。教育観察実習をますます有意義な実習にするためには、教員養成プログラムにおける教育実習観察の系統的な位置づけ、教育実習観察の客観的・具体的な到達目標の設定など、大学と附属学校で検討しながら

一層明確にしていく必要がある。(文責：島本靖)

(3) 附属三原中学校

観察実習生を受け持った教員に対して、どんな観察実習を行ったか、どんな成果があったか、課題は何かについてアンケート調査した。それらを整理すると次のようになる。

(1) 観察実習の内容

観察実習の基本的な内容は、本実習生の実習に密着し、その様子を「観察する」「記録する」ことである。その主なものは、授業の準備、授業そのもの、授業後の反省会への参加と観察である。その中でも、特に全教科で反省会への参加が重視され、観察実習者が質問したり自分の考えを述べたりする機会が多くとられていた。これは、能動的な観察行為を促すために、また、授業の見方を学ぶために効果的であったようである。

また、少数ではあるがいくつかの教科で体験を取り入れた観察を行ったものもある。教材づくりへの参加、実験や実習の事前準備の手伝いなどである。さらに、担任業務の観察については、本実習生と同じようにホームルーム、昼食、清掃などで、生徒とかかわりながらの観察が行われていた。

(2) 観察実習の成果

教育実習に対する意識や意欲、自信や安心感などの情意面の変容については、多くの教科で肯定的な意見が見られた。観察実習の初日と二日目の実習生の表情や態度の変化に、それがよく表れていたという。

次回に体験する本実習の内容の理解と準備という点においても、次のような評価があった。

- ・生徒の実態、学校生活の様子など学校の雰囲気を肌で感じる事ができたことは大きい。
- ・授業をする上で教材研究や指導案がいかに重要であるか、事実をとおして理解させる事ができた。
- ・失敗例を交えながら本実習生が語る経験談がとても有益であった。

なお補足的ではあるが、観察実習生に「見られる」立場の本実習生についても、「実習生としての成長の自覚」などの面で成果があるとする意見もあった。

(3) 観察実習の課題

最も多かった課題は、次の2点である。

- ・一日の終了時間が、本実習生と観察実習生とで異なるため、一日の終わりにある反省会に最後まで参加させることができなかった。
- ・観察実習の体験を本実習にいかすための具体的な内容や方法がまだ整備されていない。

また、これ以外に少数意見として、「本実習生への指導が中心になるため、観察実習生への指導が十分に行き渡らない」などの問題が指摘されていた。

(文責：木本一成)

(4) 附属福山中・高等学校

教育実習観察の観察対象は本実習中の実習生である。

その観察を通して本実習の態様を知り、本実習までの期間中の自己の課題を明らかにし、これを見極め、その克服に向かう。そのために教育実習観察はあるはずである。

観察実習終了時、学生に問うてみる。その回答から判断するに、観察の趣旨を理解していない者がいる。漫然と生徒の様子を批評する者、附属教員の仕事ぶりに感心する者、学校の雰囲気について語る者。おおかた、観察のピントが合っていない。

多くは、いろいろ勉強になったと言う。では、そのうち自分にとって一番大きな課題は何なのか、聞いてみる。しかし、なかなか返答がない。

観察実習は有意義だった、だから、授業を見るこのような経験を本実習までにたくさん積んで本実習を迎えたいと真面目に答える学生もいる。教師になった後であっても経験がすべてではない。いわんや学生が教職経験を積むことはできない。本実習でも教壇に立つ時間数がすべてでもない。本実習までの学生には、学生として深めるべきものがあるはずである。教育実習に先立つ「力」をつけるためのいわゆる勉強と、教養を深めるための学生生活。そのための一定の期間が必要だと思う。

そもそも、教職に就くということを現実の問題としてとらえ、そのための実習について考察するには、彼らは大学生となってからあまりにも日が浅い。夢と希望が大きいことはいいことであるが、社会人としての自覚が、教職を目指す卒業前の学生の意識と比べれば弱いと言わざるを得ず、意識面で大きな隔りがある。そういうところを、実際の実習現場にいる生身の生徒達は敏感に感じている。そういう声を多く耳にするようになった。実習生を受け入れ、彼らと向き合う附属の生徒の中に、言い難い動揺や不安が生まれている。高校生からすれば、少しだけ年上の大学生の、しかも本当に心もとない力量の実習生の授業に耐えなければならない。しかも、その本実習生に寄り添っている観察実習生が放つ視線、その焦点の定まらない視線に耐え、生徒達は一生懸命、教育実習に協力している。そうしなければ、生徒達の学習自体が揺らぐのであり、何がどうであれ生徒達の学習の規律は守らなければならない。そうしてこそ、豊かな教育実習の場を提供できる附属学校であり続けるのである。

教育実習観察においては、本実習の態様を観察することによって、本実習に向かう自己の見極めがなされ、自己の課題が明らかにされなければならない。形式的なプログラムに墮してはならない。教育実習一連のプログラムの趣旨が学生に徹底されなければならない。教育実習を受け入れる附属の願いである。(文責：竹盛浩二)

4. おわりに：「教育実習観察」の成果と課題

本稿の目的は、「特色ある教育実習プログラム」の実施に関して、「教育実習観察」の効果に焦点化して

報告することであった。実習後に行ったアンケート調査の結果を見る限り、その第1の目的は十分果たすことができたと評価できよう。

「小学校教育実習観察」において、「小学校」「授業」「教育実習」のそれぞれのイメージが深まったかどうかを尋ねた項目に対して、評定平均値が4.34～4.84、肯定的な評価の学生も88.1%～98.5%と高い割合であったこと、また「中・高等学校教育実習観察」においても、「中学生あるいは高校生」「教育実習」のイメージが深まったかどうか、「教育実習に向けて準備すべきことが明らかになった」という各質問項目に対して、「そう思う」あるいは「少しそう思う」と肯定的に回答した観察実習生の割合が、それぞれ86.8%、99.5%、93.2%であった。また、全体的な評価をたずねた「教員を目指す(志す)ものとして有意義であった」に対しても、小学校で97%、中高でも89.3%が、そう思っており、これらは予想以上の成果であったと言えよう。

本実習までに取り組みなければならない課題として、小学校では、授業に関する知識・スキルの向上、子どもへの接し方、自身の資質・能力の向上を、中高では、教科内容や教材研究、授業づくり、学習指導案の作成過程を挙げている。授業づくりや指導案作成など授業に関する課題は共通であるが、小学校では「子供への接し方」などが多かったのに対して、中高では指導内容がより高度で専門化されているため、「教科内容や教材研究」が高くなっている点が興味深い。このような課題を発見し、意識化できたことも本実習の大きな成果だと思われる。

実際に観察実習生を受け入れる附属学校からも、「実習そのものに疑問、不安、躊躇を感じている学生にも非常に有効で、悩み等を明日からの期待に変えている」「様々な視点から教育実習の在り方を意識する契機になったものと思う」「教育実習に対する意識や意欲、自信や安心感などの情意面の変容については、多くの教科で肯定的な意見が見られた。」など一定の評価がなされているようである。

今回の調査では、観察される3年次生を対象とした調査も行っている。観察する学生にとっていくら成果が大きくても、観察される学生の負担が大きかったり、教育実習に支障を来すようでは本末転倒しているからである。

中高実習では、自分たちも「教育実習観察」を直前に体験しているためであろうか、「観察されることへの不安」を感じている割合は32.9%と、あまり高くない。それどころか、「2年生がいたのでやる気が出た」学生が44.9%と過半数に迫る割合に達している。小学校実習はすでに単位化していることもあり、事前指導で連携を図っているが、その意義を肯定的に受け止め

ているようである。このように、観察される3年次生にとってもそれほど負担はないと思われる。

もちろん、導入されたばかりであるので今後の課題も多い。特に単位化されていない中高実習に多いようである。最後にそれらを3点にまとめておく。

まず最初に「事前指導の充実」が挙げられる。附属学校からも、意義を理解していない学生や、漠然と観察している学生についての指摘がある。特に中高実習は十分な事前指導がなされていない。来年度からの単位化に伴い、事前指導の内容を検討する必要がある。

第2は「学年間の連携・連絡体制」である。中高においては、ペアリングは教科、学年間は学生どうしの電話連絡に任せている。この方法が不徹底を招いている可能性があり、改善を模索しなければならない。また、学年間の打ち合わせ内容についても改善の余地があるようである。

第3は「課題に対する支援」を挙げたい。この実習を通して学生達は多くの課題を見出している。はたして本実習までに課題を解決するようなカリキュラム、あるいは支援策が採られているのであろうか。それを含めて、この実習の成果を本実習へ結びつける方策も検討しなければならない。

本研究では、教育実習観察の大きな成果が確認され、残された課題が明確になった。課題に対しては解決策を講じて、さらに実のある実習にしたい。

最後に、教育実習のみならず、カリキュラム改革においては、その改革を評価することは不可欠である。本研究は「カリキュラム評価」の点においても意義あるものであり、今後も継続的にやりたい。

(文責：松浦伸和)

参考文献

- 1) 若元澄男他(2005)「広島大学における『特色ある教育実習プログラム』の構築に向けて」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第33号, 2005.3, pp.31-40
- 2) 若元澄男他(2006)「『特色ある教育実習プログラム』の試行的取組」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第34号, 2006.3, pp.1-10
- 3) 木村博一他(2007)「『特色ある教育実習プログラム』の試行的取組(Ⅱ)」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第35号, 2007.3, pp.241-250
- 4) 木原成一郎他(2008)「『特色ある教育実習プログラム』の実施に関する研究(Ⅰ)―『教育実習入門』の効果に関する調査研究―」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第36号, 2008.3, pp.31-40